報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　大正デモクラシーにおける抵抗文化の形成についての研究
—天皇制イデオロギーと知識人の亀裂—

氏　　名　奥田浩司

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、大正デモクラシーにおける抵抗文化の形成についての研究成果をまとめたものである。全体で４部構成となっており、序章・終章、および以下の 12 章から構成されている。

第Ｉ部では、有島武郎と大逆事件の関わりについて、以下の三つの章において議論を行った。第１章では、白樺派における有島の位置について、「絵画の約束論争」を補助線として考察した。「絵画の約束論争」は、武者小路実篤と木下杢太郎の間で交わされた論争である。だが、有島が武者小路を批判していることを踏まえれば、論争における武者小路の発言は、有島への反論になっていると考えることができる。武者小路は論争において、芸術家としての「自己」を特権化し、社会との通路を切断していく。それに対して、木下は、「自己」は社会に開かれていくべきであると述べる。また、木下は、暗に武者小路が大逆事件を視野に入れないことを批判している。有島も同様の批判を、武者小路に対して行っている。有島は白樺派の同人ではあったが、「自己」と社会の関係については、立場を異にしていると考えられる。

第２章では、有島の「かん／＼虫」について議論を行った。「かん／＼虫」については、先行研究において大逆事件の影響が指摘されている。このような先行研究の指摘を受け、より具体的に、大逆事件とテクストの関係について議論をした。有島は米国留学中に社会主義思想を受容し、ロンドンでクロポトキンに会うなど、社会主義思想に対する理解を深めていた。有島は米国留学中に「かん／＼虫」の初稿と考えられる「合棒」を書き上げるが、帰朝後に「かん／＼虫」と改題改稿して、『白樺』に掲載する。「かん／＼虫」で注目されるのは、労働者である「虫」と知識人である「私」の連帯の論理である。「私」は、「虫」の復讐を「法律的制裁」であると考え、知識人と労働者の連帯の可能性を見いだす。このような知識人のあり方について、幸徳秋水が唱道していた直接行動論との近接性という観点から論じた。

第３章では、武者小路の『幸福な家族』について議論を行った。『幸福な家族』は、

1940年の1月から10月にかけて『婦人公論』に連載されるが、時代は戦争に向けて傾斜を強めていた。このような時代状況において、武者小路の『幸福な家族』は大衆読者を獲得していく。その理由として考えられるのは、〈母〉を中心化する物語の構成であることを指摘し、母性イデオロギーの問題について論じた。

第Ⅱ部では、有島の「或る女のグリンプス」の成立過程と婦人解放問題の関わりについて、以下の三つの章において議論を行った。第4章では、「或る女のグリンプス」が初出の段階では『白樺』に連載されていたことを踏まえ、筑摩版全集に単独の作品として収録されることになった背景及び問題点について論じた。背景として考えられるのは、作品論が主流となっていた研究状況である。問題点として、一つの作品となることによって、テクストに書き込まれていた大逆事件との関わりが見え難くなってしまっていることを指摘した。

第5章では、「或る女のグリンプス」の同時代性について議論を行った。有島は「二つの道」を書くが、そこでイプセンの戯曲の主人公であるヘダ・ガブラーに言及する。ほぼ同じ時期に、坪内逍遥は、「新しい女」とは何かという問題について講演を行い、イプセンの戯曲について詳しく分析している。有島は「二つの道」を書いた後に「或る女のグリンプス」の連載に取りかかるが、〈女〉の衝動性、無意識性に焦点が当てられている。このような女性像は、逍遙の「新しい女」と同じ位相にあることを指摘した。

第6章では、「或る女のグリンプス」における〈母性〉と婦人解放問題の関わりについて議論を行った。「或る女のグリンプス」における〈母性〉を考えるさいに、イプセンの『海の夫人』からの影響は重要である。しかし、最終的に、女主人公の〈性欲〉に焦点があてられたことは、有島におけるイプセンからの離脱を示唆していると考えることができる。

第Ⅲ部では、有島の『或る女』と母性保護論争の関わりについて、以下の二つの章において議論を行った。第7章では、有島における家族について、思想性という観点から考察した。有島は、妻、子供との関わりを通して、『青鞜』や婦人解放問題と接点を持っている。とりわけ有島の「子供国有論」については、母性保護論争と関係のあることを指摘した。

第8章では、『或る女』が母性保護論争とどのような関わりを持っていたのかという点について議論を行った。第7章で論じたように、有島は『青鞜』や婦人解放問題と接点を持っている。そのことは単に思想上の問題にとどまるのではなく、『或る女』にも反映されていると考え、議論を展開した。

第Ⅳ部では、朝鮮語で書かれた雑誌である『現代』を中心に、以下の四つの章において議論を行った。第9章では、『文化生活』における吉野作造の記事について考察した。大正デモクラシーの中心的な知識人であった吉野の政治思想に、天皇制と親和的

な側面のあることは否めない。そのことは、森戸事件に関連して書かれた、クロポトキンの思想に関する発言に示唆されている。他方、有島も森戸事件に関連してクロポトキンの思想について述べているが、吉野とは異なり、天皇制には批判的な内容となっている。このような検証を経て、吉野が『文化生活』に連載した朝鮮に関わる評論について議論を行った。

第１０章では、朝鮮語雑誌『現代』の概要について報告した。『現代』は、三・一独立運動後に、朝鮮基督青年会に所属していた朝鮮人留学生によって、日本で発行された機関誌である。記事の内容は、主として思想的なものが多い。『現代』の「編集兼発行人」であった白南薫は、吉野と親交がある。したがって、大正デモクラシーの影響が示唆される。その一方で、「鳳仙花」の作曲家として知られる洪蘭坡の小説が掲載されるなど、『現代』には総合雑誌的な性格も備わっていることを指摘した。

第１１章では、『現代』に掲載された、卞熙瑢の「民本主義の精神的意義」を中心に、議論を行った。「民本主義」の思想は日本の知識人に広く浸透していたと考えられるが、通俗的な教養書、或いは教養人の発言を見る限り、天皇制下のデモクラシー思想であり、その点に吉野の影響を見ることができる。それに対して、卞熙瑢の「民本主義」に関する記事からは、植民地主義批判と天皇制批判を読みとることができる。

第１２章では、『現代』の記事における、植民地主義への抵抗について議論を行った。『現代』第１号には、金俊淵の「現代の使命」という記事が掲載されている。金俊淵は吉野と親しい関係にあった。金俊淵の記事から読みとれるのは、吉野の思想を受容しながらも、植民地主義批判の思想へと変容させていることである。また、『現代』第９号には、関泰瑗の「「朝鮮民族美術館」の設立と柳氏」という記事が掲載されている。この記事では、柳宗悦が京城に設立しようとしていた「朝鮮民族美術館」について紹介している。注意を要するのは、関泰瑗の意図は植民地朝鮮の解放にあるのであり、柳の目的とは異なっていることである。

本論文では、大正デモクラシーにおける抵抗文化の形成について、有島及び朝鮮語雑誌『現代』を通して検討した。有島と朝鮮人留学生は、大正デモクラシーの中心的な知識人であった吉野に近い存在である。しかし、彼らは吉野の思想に対して批判的であったと考えられる。大正デモクラシーは、このような知識人の亀裂を内在させていたのである。